

GEO 協議会 だより

25年12月1日
No.16

編集・発行：

～白・黒・赤を巡る旅～
美祢市ジオパーク推進協議会事務局

< 連絡先 : 0837-63-0055 >

～第6回銅山まつり～

10月27日(日)に、長登銅山文化交流館(大仏ミュージアム)において「第6回銅山まつり」が開催され、事務局員もスタッフとして参加しました。当日は、今年で13回目となる古代銅製錬復元実験(写真右)や、鑄造体験等のものづくり体験、銅山探検ツアー(写真中央)等の様々なイベントが行われました。中でも、大仏の赤ちゃんをイメージした新キャラクターの発表会では、奈良県のマスコットキャラクター「せんとくん」も登場し、村田会長(市長)と共に熱い握手を交わしました(写真左)。



左から順にせんとくん、
村田会長、新キャラクター
—(名前募集中!)



講演会のお知らせ

IODP (国際深海科学掘削計画) キャンペーン in 山口 —「ちきゅう」が解き明かす地球の姿—

「ちきゅう」とは、海底下 7,000 メートルまで孔(あな)を掘ることができる船のこと(右下写真)です。「ちきゅう」は、地球内部を探索することで、巨大地震発生の仕組みを解き明かす研究などに使われています。

今回の講演会では、IODP(国際深海科学掘削計画)と呼ばれる世界 26 国が参加する国際研究プロジェクトの内容を踏まえ、秋吉台との関連性を第一線で活躍する研究者からお話を伺います。また、実際に紀伊半島沖で掘削中の「ちきゅう」との衛星ライブ中継もあります。引き続き午後からは、美祢ジオパーク構想の魅力紹介をテーマに、秋吉台を研究フィールドとしている研究者から、私たちの知らない秋吉台の希少性についてのお話を伺います。皆様お誘い合わせの上、ぜひお越しください!!

日時：12月23日(月・祝)

10:30~15:00

場所：秋吉台科学博物館 第1講座室

※詳細は、同封のチラシをご覧ください



第4回 教えて！じおくーん

皆様、お久しぶりです！地質学専門員の「じお」です。9月号（No.14）から、美祢ジオパークを構成する7つのジオサイトについて順番にご紹介していますが、今回は、表面の記事に出てきた「長登銅山跡サイト」についてご紹介します！

長登銅山跡サイトは、奈良時代から昭和35(1960)年まで採掘された長登銅山と、その歴史を学ぶことのできる長登銅山文化交流館(大仏ミュージアム)を中心としたジオサイトです。長登では「その昔、奈良の大仏を鑄造する際に銅を献上したので、“奈良登”という地名を賜ったが、長い間に訛って“長登”になった」という地名伝説が語り伝えられていましたが、信憑性のない伝説として長い間見過ごされてきました。



長登銅山・大切4号坑跡

しかし、昭和47(1972)年に、長登銅山の山中で奈良時代の須恵器片が発見され、古代銅山の存在が知れるようになりました。また、昭和63(1988)年には、奈良東大寺大仏殿西隣の発掘調査が実施され、この時に出土した青銅塊の化学分析の結果、奈良の大仏創建に用いられた原料銅は長登銅山産であったことが証明されました。

では、奈良の大仏創建に、なぜ長登銅山産の銅が使われたのでしょうか？

理由は、以下のように考えられています。

✓**7世紀頃に銅山として既に開発されていたから**：7世紀中頃の国秀遺跡などで銅工房の痕跡が見られ、そこでは長登銅山の銅鉱石が使われていたと考えられています。すなわち、長登銅山は国内でも古い時代に開発されていたので、その銅は、大仏の原料銅になったと考えられます。

→**なぜ古くから開発されていたのでしょうか？**その理由の一つは、以下のように考えられています。

石灰岩地帯に接しているから：銅製錬には、炭酸カルシウム(CaCO_3)からなる石灰石(石灰岩)が必要ですが、秋吉台の石灰岩地帯に接する長登銅山の銅鉱石には、既に炭酸カルシウムが含まれています。

長登銅山文化交流館(大仏ミュージアム)

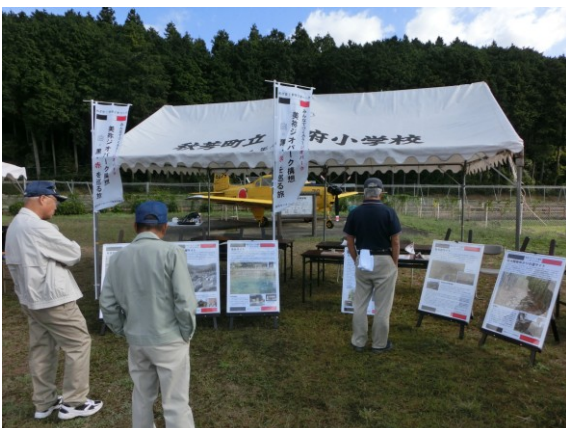
開館時間 9:00~17:00

休館日 毎週月曜日・年末年始など

住所 美祢市美東町長登610番地

電話番号 08396-2-0055

～第2回ふれあい・にぎわいフェスタ IN 堅田～



10月12日(土)に、別府弁天池駐車場のふれあい広場において、別府地域の魅力を伝えるまちおこしイベント「第2回ふれあい・にぎわいフェスタ IN 堅田」が開催されました。本協議会では、美祢ジオパーク構想紹介ブースを出展し、チラシの配布や各ジオサイト紹介パネルの展示を行いました。他にも、美祢ジオパーク構想のテーマである「白・黒・赤」色を使った「GEO餅」や「GEOむすび」が売られる等、ジオパーク活動の広がりを実感することができました。